

榎屋 友子

スペイン、モロッコからインド、中央アジアに至る広い地域のイスラム建築で共通する3次元の装飾、それがムカルナスだ。ドームや半ドームなど建築上部の一部または全体を、凹状の半花卉形を重ねて満たすことで、鍾乳石あるいは蜂の巣のような幾何学的立体を構成する。石材や木材に彫刻したり、漆喰で形成したり、さらにそれらに彩画したり、タイルで表面を覆ったりと、時代や地域により素材や表面の装飾法も多様だが、凹凸のある形そのものが一番の装飾要因であることが特徴だ。

「ムカルナス」は、本来アラビア語ではなく突起装飾を指すギリシヤ語が語源と言われ、石工用語に由来する。正方形の部屋の上ドームを架げる際に、部屋の角の直角からドーム下端の円弧に切り替えていく転換部分を見ええよく処理するため、半花卉ユニットを少数配置したことから発展したと思われるが、これは10世紀までにイスラム地域の東西で確認でき、発祥の場所について現在でも議論が続いている。

既に11世紀にはかなり複雑な構造のムカルナスが現

賞 術 鑑

に創建された診療と医学学校を兼ねる慈善施設で、20世紀初頭まで機能していた入り口の上に漆喰で覆われたムカルナスがある。最下層のミラーチ列に支えられたユニットの数が上層に行方につれて少なくなり、

病院内外を飾る
タマスカスのヌール・アッディーン病院は、12世紀

頂上の織の入った大きなユニットに収束して、平たい半ドームを成す。入り口よ

発想・技術総力を結集

半花卉形でドームを満たす「ムカルナス」

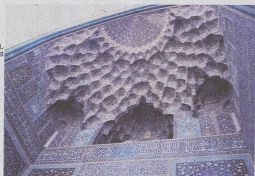
りもそれを飾るムカルナスの方が大きくなった。

入り口の直後には正方形の部屋があり、その上には外からも形を認めることができる、ムカルナスだけで構成されたドームがある。

明かり取りが各所に配置され、天に向かってじやばらのように盛り上がるムカルナスの形がよく見える。

豊かな文化反映

現在イマーム・モスクと呼ばれる、17世紀に建てられたイスファハンの王のモスク入り口上部のムカルナスは、イランにおける完成形だ。洋の東西の商人たち



イマーム・モスクの入り口（イスファハン、17世紀）—筆者撮影

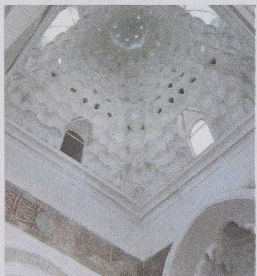
が闊歩し、「世界の半分」とまで謳われた国際都市イワれた国際都市イワファハン。その長方形の広大な広場に面するムカルナスは、モスクの中に入らない異教の人々にさえ、国の文化の豊かさをその驚異的な造形で印象付けた。

表面は、組み合わせられた色の連々タイル片が文字や図案を表すタイル・モザイクで覆われている。植物や文字が曲線の輪郭を取るため、切り取り・組み合わせが困難で、時間と手間のかかる贅沢な装飾法だ。

ムカルナスは、左右のテラス天井に連続し、左右の角の部分でドームを頂くなど、建物固有の意匠を凝らす。立体であるため、見る時間や角度により異なった陰影や形状を楽しむ。

ムカルナスがなくても建物の機能は何ら損なわれないうが、あれば美しい。美のためだけに、イスラム地域の発想力と技術力、労力と財力が結集されて、ムカルナスが生まれて発展した。人々の視線を高め、存在

だ。(東京大学教授)



ヌール・アッディーン病院内部金一深見奈緒子撮影